

# Frederick Marryat's Perspective on Americanisms

フレデリック・マリアットから観たアメリカニズムズ研究

(要旨)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号 : D125673

氏名 : 山東 資子

本論文は、これまでほとんど研究対象とされてこなかった Frederick Marryat に着目し、彼の視点から 19 世紀前半におけるアメリカ英語の状況を詳察することを目的とする。1839 年に出版された Marryat のアメリカ滞在記に収録されているアメリカニズムズが、彼の目にはどのように映り、何が奇異に感じられたのかについて概観する。そして彼の小説、あるいは彼と同時代にアメリカを旅行した他のイギリス人の作品にそれらがどの程度登場しているかを分析した上で Glossary としてまとめることにより、当時のアメリカ英語の特徴を洗い出し、アメリカ英語成立に至るまでのプロセスの一端を明らかにする。

第 1 章は本研究に至る背景を述べた。アメリカが言語面で独立したのは Webster が *An American Dictionary of the English Language* を出版した 1828 年であり、The National Period (1776-1898) がアメリカ英語の確立した時期だといわれている。特に 19 世紀は多くのイギリス人がアメリカを旅行し、彼らが初めて遭遇した新しい英語の用法を記録したエッセーを残している。Marryat もその 1 人で 1837~39 年にかけて北米を旅行後、*A Diary in America, with Remarks on its Institutions* (第 1・第 2 シリーズ各 3 巻) を出版した。*Diary I* 第 2 巻のエッセー“Language”にアメリカ英語の特徴が記されているが、多くは用例が挙げられているだけで、それらをどこで耳にしたのか、また誰が使っていたかなどの詳細については明記されていない。そこで 15 種類の辞書を用いて Language に挙げられている語句がアメリカニズムズのどのグループに属するのか、分類を試みようと考えた。なお、本論で扱うアメリカニズムズは語句に限定し、発音・文法・スペル・メタファなどは除外した。

第 2 章ではアメリカニズムズの語源・定義と先行研究について言及した。Americanism は Scotticism から生み出された造語でスコットランド人の John Witherspoon によって 1781 年に初めて使用された。Mencken (1919, 1936<sup>4</sup>)によると、イギリス人に軽蔑された最初のアメ

リカニズムは *bluff* の名詞用法であった。他にも Thomas Jefferson が *belittle* という動詞を使ったことで非難を浴びるなど、現在に至るまでアメリカニズム批判は後を絶たない。アメリカ英語に関する先行研究として Mencken (1919, 1936<sup>4</sup>)、Krapp (1925)、Marckwardt (1958) などが挙げられる。*The American Language* というタイトルが示すように、Mencken はアメリカ英語を独立した言語としてとらえているのに対し、Krapp は *The English Language in America* とあらわすことにより、英語の一方言としてとらえている。それに対し、Marckwardt は *American English* と表現し中立的な立場を取っている。その他、アメリカ英語に関する先行研究はいくつかあるものの、イギリス人の観点から行った研究は少なく、Mencken (1945: *Suppl. I*, 48-55)、Mathews (1931: 130-40)、Motoyoshi (1987)の一部が Marryat の日記および作品のアメリカニズムに触れている以外は、Read (1933)が 18 世紀のイギリス人からみたアメリカニズム、Imahayashi (2006) が Dickens のアメリカニズムを扱っているに留まる。

第 3 章は Marryat が *Diary I* と *Diary II* の中で指摘した 78 のアメリカニズムを Type I: イギリス本国では古語・廃語・方言となったがアメリカでは生き残った語句、Type II: アメリカで新たな意味を獲得した語句、Type III: 明らかにアメリカ起源の語句、Type IV: 既存の語を結合させて作られた語句、Type V: 他の言語から借用された語、Type VI: 品詞転換された語、Type VII: その他、に分類した。その結果、最も多かったのが Type II の 33 語句、次いで Type III の 25 語句、Type I が 7 語句、Type IV が 4 語句、Type V が 4 語、Type VII が 2 語句、Type VI が 1 語であった。ただし名詞から動詞への品詞転換の例として挙げられていた *opinion* は *obsolete* であることから除外した。また 40 語句は、*Diary I* と *Diary II* でのみ使用されており、*OED* 初例として Marryat が引用されているのは *bad*, *considerable*, *fork*, *gone coon*, *mean*, *quit*, *splunge*, *take in wood* であった。

第 4 章は *Diary I* と *Diary II* 以外の Marryat 作品で、どの程度アメ

リカニズムズが使用されているか分析した。アメリカニズムズが登場するのは *FM* (1829), *KO* (1830), *PS* (1834), *JF* (1834), *ME* (1836), *PJ* (1840), *PK* (1842), *MV* (1843), *SC* (1844) の 9 作品であるが、最後の 2 作品が北米を舞台にしている他は海・川を舞台にした小説で、主にアメリカ船の船員たちによって使用されている。また *ME* に登場する Mesty は奴隷として連れて来られたアフリカ人であるが、ニューヨークで英語を習ったことから準アメリカニズムズを使用していると考えられる。第 3 章で分類した 77 語句のうち 17 語句が 9 作品で使用されているが、*clipper*, *log cabin*, *snake fence* は *Diary I* と *Diary II* では言及されていない。*clipper* は既に 1830 年出版の *KO* で使用されているが、Marryat の経歴をかんがみると海軍時代に *clipper* の存在を知っていても何ら不思議ではない。*backwoodsman* と *prairie* はフロンティアを表す典型的な語で *MV* と *SC* だけに登場するが *prairie* は単体のみならず *prairie dog*, *prairie wolf* といった複合語としても使用されるため使用頻度が最も高く 255 例みつかった。また Marryat が訪米前に出版した *FM*, *KO*, *PS*, *JF*, *ME* の 5 作品で *clipper*, *I calculate*, *I guess* が使用されている。

第 5 章は Francis Trollope の *Domestic Manners of the Americans* (1832), Harriet Martineau の *Society in America* (1837), Charles Dickens の *American Notes* (1842) と *Martin Chuzzlewit* (1843-44) に焦点を当て、Marryat が指摘したアメリカニズムズが彼らの作品に登場するか、4 人の見解が一致するか否かを検証した。第 3 章と第 4 章で扱ったアメリカニズムズのうち 34 語句が 4 作品にみられるが、*absquatulate*, *backwoodsman*, *clear out*, *clipper*, *consider*, *ground hog*, *out of sight*, *some* は 3 人とも使用していない。しかし Marryat の 10 年後に訪米した Stuart-Wortley が *absquatulate* の変異形 *absquatulate* を引用符付きで用いていることがわかった。また見解が分かれたアメリカニズムズには次のようなものがある。まず Martineau は *prairie* には好印象を抱いているが Dickens は「二度と訪問したくない場所」と形容する

ほど拒否反応を示した。また Trollope と Dickens は *sawyer* と *snag* を並列表記しているのに対し、Marryat は *snag* を単独で使用していた。さらに唯一 *snake fence* に言及している Martineau は悪印象を抱いていた。なお Marryat は *strike* には「攻撃する」の意味があると言及していたが *MV* では「偶然行き当たる」の意味で使用しており、この点は Dickens と見解が一致していることがわかった。

第 6 章は第 3 章から第 5 章までのアメリカニズムズを Glossary としてまとめた。ここで用いた定義のほとんどは *OED* に記載されているが、*curl up*, *fiveble*, *fourble*, *meat ax*, *mint julep*, *miss a figure*, *nasty*, *sawyer*, *take in wood* については明記されていなかったため、他の辞書および先行研究を参照した。

第 7 章は各章の要旨をまとめた。Marryat が指摘していたアメリカニズムズは、第 3 章で Type VII に分類した *curl up* と *shut* を除いては、概ね辞書や先行研究で触れられているものであった。また一部見解が異なるものはあったものの、他のイギリス人作家 3 人とそれほど大きく相容れない語句はなかった。本論では Type V に属する借用語は 4 語に留まったが、19 世紀は移民により諸外国の影響を受けたアメリカニズムズが増加し、アメリカ英語が成長かつ確立した時期である。移民の歴史をはじめ、元々イギリスにあった英語の変容を後押しした社会的・文化的要因を紐解きながら、今後もアメリカ英語の成立過程を明らかにしていきたい。